



Title	カザフ語の再帰代名詞 $\theta\eta$ について
Author(s)	藤家, 洋昭
Citation	大阪外国語大学論集. 1998, 18, p. 103-118
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/79750
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

カザフ語の再帰代名詞 өз について

藤 家 洋 昭

Қазақ тілінің өздік есімдігі жөнінде

ФҰЖИЕ Хироаки

Қазақ тілінде өздік есімдік ретінде келетін "өз" деген сөз бар болып, оны көрсететін сөзі арасындағы байланысы қазірге дейін әлі анықтала қойған жоқ. Бұл мақалада қазақ тілінің өздік есімдігімен оны көрсететін сөз арасындағы синтаксистік байланысы зерттелді. Әсіресе, өздік есімдікті көрсететін сөздің сөйлемде бастауыш болып келуі керек пе, және олар ұқсас бір сөйлемнің ішінде болуы керек пе дегендерге егжей-тегжейлі зерттеу жүргізілді.

Нәтижеде, қазақ тілінде өздік есімдікті көрсететін сөз сөйлемде бастауыш болып келе бермейтіндігі, сондай-ақ олар ұқсас бір сөйлем ішінде бола бермейтіндігі анықталды.

1.はじめに

同じことのくりかえしをさける手段は、さほど珍しいものではない。例えば、文中に同じ名詞句がくりかえして出てくる場合、代名詞などで置きかえることがよくおこなわれるが、その中のひとつに再帰に関する語がある。英語では、myself などの再帰代名詞が、日本語では「自分」などがそれにあたる。

日本語の再帰に関する語の研究はすでに 1960—1970 年代から盛んに行われ、成果があげられてきた⁽¹⁾。

一方、カザフ語の再帰代名詞 (өздік есімдік) については、形態的な特徴などが記述されたことはあったが、文中において再帰代名詞が指示する語である先行詞 (antecedent) と再帰代名詞の関係に関してはこれまで全くと言っていいほど関心が払われてこなかった。例えば代表的な文法書である Қазіргі қазақ тілі⁽²⁾ は書かれた年代が古いのでやむを得ないにしても、比較的

最近のものである Балақаев (1992), Қараев (1993) などにも先行詞との関係については部分的なこと以外は記述がない。カザフスタン以外で出版された、Krueger (1980), Geng; Li (1985) も同様である。したがってカザフ語の再帰代名詞とその先行詞との関係はまだほとんど明らかにされていないと言っても過言ではない。

本稿ではカザフ語の再帰代名詞 (өздік есімдік) өзについて先行詞 (antecedent) との関係を記述する。3.1 では өз の先行詞は主語である必要はないということが明らかになり、3.2 では先行詞と同じ文にある必要がないことが明らかにされる。

2. өз 概説

өзについてこれまでにわかっていることをまとめておこう。

カザフ語の再帰代名詞 (өздік есімдік) と呼ばれるものにどんなものがあるかというと、өз ただひとつである。

2. 1 形態的な特徴

活用などの面では өз は (一般の) 名詞 (зат есім) と何ら変わった点はなく、活用の面では再帰代名詞という範疇をたてる必要はなく、名詞の一種であるとすれば十分である。例えば格変化においては次のようになる⁽³⁾。

主 格 өз
 属 格 өз—дің
 与 格 өз—ге
 対 格 өз—ді
 位 格 өз—де
 奪 格 өз—ден
 補助格 өз—бен

比較のために、(一般の) 名詞 (зат есім) である сөз 「ことば」を例にあげると、өз の場合と全く同じ格変化であることがわかる。

主 格 сөз
 属 格 сөз—дің
 与 格 сөз—ге
 対 格 сөз—ді
 位 格 сөз—де
 奪 格 сөз—ден

補助格 сөз—бен

ちなみに、代名詞 (есімдік) と呼ばれているものを見ると、名詞とは格変化が若干異なっている。例えば, ол 「あれ、それ」を例にとると次のようになる。

主 格 ол
 属 格 оның
 与 格 оған
 対 格 оны
 位 格 онда
 奪 格 онан
 補助格 онымен

(代名詞でなく一般の) 名詞 (зат есім) である қол 「手」と比べてみると格変化の違いがよくわかる。

主 格 қол
 属 格 қол—дың
 与 格 қол—ға
 対 格 қол—ды
 位 格 қол—да
 奪 格 қол—дан
 補助格 қол—мен

なお、上にあげた сөз と қол で格語尾が異なっているが、これは母音調和と子音同化による異形態であり、本質的な違いではない。一方、 ол と қол は格語尾が付く環境としては全く同じでありながら格変化は同じではない。

再帰を表す語には英語の myself / himself / herself / themselves のように言語によっては人称・性・数の区別があるが、カザフ語の өз には性の区別はない⁽⁴⁾。カザフ語の өз が人称・数をどのように表すかは次の 2.2 で述べる。

2.2 өз の人称・数

カザフ語では名詞に付いてその名詞の所有者を表す тәуелдік жалғау (所有接尾辞、以下 тәуелдік жалғау を所有接尾辞と呼ぶ⁽⁵⁾) と呼ばれる接辞がよく用いられる。これは普通の

名詞に付いたときは、*үй-ім* 「家・私の『私の家』」のように所有者を表す⁽⁶⁾ことが多いが、*өз* に付いたときは先行詞の人称・数を表す。

өз-ім, өз-ің...

өз は通常は所有接尾辞を付けて *өзім, өзің...* などの形で用いられることが多く、その点では日本語の「自分」などとは異なっていて、人称がはっきりしているという点からは「私自身」「彼自身」あるいは英語の *myself, yourself*に通じるところがあるが本稿ではこの点についてはこれ以上触れない⁽⁷⁾。

2.3 *өз* の文中での位置

өз と先行詞の関係は後に触れるがここでは *өз* そのものが文中でどのように現れるかを簡単に見ると、文中では比較的自由に現れ、文の全ての要素になると言われている (Қараев 1993)。具体的にはだいたい次のようになる。

(1) *Нұрбек өзің сындады*⁽⁸⁾ .

ヌルベク・自分 (所有・対格)・批判した⁽⁹⁾

「ヌルベク (人名) は自分を批判した。」

(2) *Нұрбек өзіне сұрақ берді.*

ヌルベク・自分 (所有・与格)・問い・与えた

「ヌルベクは自問した。」

(3) *Нұрбек өзінің үйінде Аманболмен ойнады.*

ヌルベク・自分 (所有・属格)・家で・アマンボルと・遊んだ

「ヌルベクは自分の家でアマンボル (人名) と遊んだ。」

(1) では目的語の位置にあり、(3) では修飾語の一部にある。このように *өз* そのものは文中でかなり自由な位置にあらわれることができることがわかる。

3. 先行詞の条件

日本語のいわゆる再帰 (代) 名詞の研究ではさまざまなことが明らかになったが、その中に次のようなことがある (井上 1976)⁽¹⁰⁾。

再帰名詞⁽¹⁰⁾ の先行詞は

1. 主語でなければならない
2. 再帰名詞と同じ単文内に存在しなくてもよい。

上の 1. にあるように、文の中における主語や目的語などの関係を考えて場合、日本語では「自分」の先行詞は主語でなければならないという条件があると一般に言われている。例えば、

(4) 太郎は母親から自分の財布を受け取った⁽¹¹⁾。

のような文では「自分」の先行詞は主語である「太郎」であり、主語ではない「母親」とすることはできない。また、いわゆる複文、つまりひとつの文のなかに別の文が存在するような文では主語も主文の主語とそれ以外の主語の複数あると考えられるが、そのような文では「自分」の先行詞も複数の可能性が考えられる場合がある。

(5) 太郎は花子が次郎に自分の写真が写っている本を見せたと思った。(郡司 1994)

(5) では「自分」の先行詞は「太郎」と「花子」の両方が考えられる。

一方、英語などでは himself などの再帰代名詞は必ずしも主語である必要はなく (6) で見るように、目的語が先行詞になることもできると言われている (郡司 1994)。

(6) John told Mary about himself/herself.

このように、再帰代名詞の先行詞が主語である必要があるかどうかは言語によって違うということができる。

次に、再帰名詞と先行詞が同じ文になければならないかどうかという問題がある。例えば、英語では再帰代名詞と先行詞は同じ文になければならないと言われている。(7) のような文では herself の先行詞は Judy であって Mary ではない (郡司 1994)。

(7) Mary thought that Judy would not show herself⁽¹²⁾.

以下3.1 では単文においてカザフ語の өз の先行詞が主語でなければならないかを明らかにし、3.2 では өз と先行詞が同じ文になければならないかどうかを検証する。

3. 1 単文

まず、文全体の中に主語と述語が一組しかない、いわゆる単文の場合を検討してみることにする。ここで明らかにされるのは өз の先行詞が主語でなければならないか否かであるが、これには暗黙の前提として「主語は өз の先行詞になることができる」ということがある。しかしそれは暗黙の前提に過ぎず確認されたわけではない。そこで主語が өз の先行詞になることができるか否かを確認することからはじめたい。

(8) Нұрбек өзінің үйінде тұрады.

ヌルベク・自分 (所有・属格)・家で・いる

「ヌルベク (人名) は自分の家に住んでいる。」

(8) の主語は Нұрбек である。そして өз の先行詞は間違いなく主語である Нұрбек である。他に同様の例として (9) (10) も加えておこう。いずれも先行詞は主語になっている。

(9) Нұрбек өзін ұрды.

ヌルベク・自分（所有・属格）・なぐった

「ヌルベクは自分で自分をなぐった。」

(10) Нұрбек өзіне сұрақ берді.

ヌルベク・自分（所有・与格）・問い・与えた

「ヌルベクは自問した。」

これらから主語が өз の先行詞になることができると確認できた。

次に、先行詞が主語以外の可能性を探ってみたい。主語以外にはさまざまな要素が考えられるが、ここでは主語以外のものが先行詞になることができるかどうかを明らかにすることが目的であるから、主語以外の要素に何があるか、また、それらについて先行詞になることができるかどうかは本稿においては検討しないことをあらかじめお断りしておく。

(11) Нұрбек Сайраға өзінің досының жағдайын айтты.

ヌルベク・サイラ（与格）・自分（所有・属格）・友人の・状態を・言った

(11) の文の主語は Нұрбек であり、Сайра は少なくとも主語ではない。しかしながら、өз の先行詞としての解釈は可能である。

Нұрбек_i Сайраға өзі_i, _i нің досының жағдайын айтты.

「ヌルベクはサイラ（人名）に自分／彼女の友だちのようすを伝えた。」

また、次のような例も見よう。

(12) Сайра Нұрбекті өзінің үйінде ұрды.

サイラ・ヌルベク（対格）・自分（所有・属格）・家で・なぐった

「サイラはヌルベクを彼の家でなぐった。」

(12) で先行詞は Нұрбек であると解釈することが可能であるが、Нұрбек は対格語尾が付いていることからわかるとおりこの文では目的語であって主語ではない。さらに (13) でも主語以外が先行詞になっている。これらはみな単文においての例であり、先行詞になっているものは、たとえ深層構造からの派生などといった考えかたをしても、深層で主語であるとすることもできず、主語とすることはできない。

(13) Нұрбек Сайрадан өзінің тұрмыс жағдайын сұрады.

ヌルベク・サイラ（奪格）・自分（所有・属格）・生活・状態・尋ねた

「ヌルベクはサイラに彼女の暮らし向きを尋ねた。」

上で見たように、主語以外のものが先行詞になっている例が多数あり、先行詞は主語に限らないということがいえる。

ここまでの考察をまとめると、先行詞は必ずしも主語である必要はない、とすることができる。

3.2 単文以外

3.1 において単文における Θ の性質がある程度明らかになった。本節では考察範囲を広げ、いわゆる単文以外の文における Θ の性質を考える。

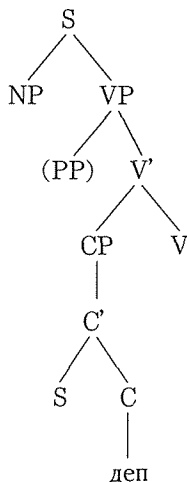
複文においてもっとも興味深いと思われるのは、 Θ と先行詞が同じ文に属するかどうかという点である。同じ文に属すとは、木構造上では、同じ S 節点に支配されるということである。複文には S 節点が多数あるわけだから、同じ節点とはこの場合直接的に支配している節点のことを指す。本節ではこの点が明らかにされるが、これ以外に、単文のところで考察した、 Θ の先行詞が主語である必要があるかどうかの問題もあらためて検討する。

一口に単文以外といってもいろいろなものがある。その中でいわゆる補文と、いわゆる関係節を含む文を取りあげ、それぞれについて検討する。

3.2.1 補文を含む文

本稿で扱う補文を含む文とは補文標識として деп を持つ次のような構造の文である。

(14)



このような補文を含む文の例として、次のようなものがあげられる。

(15) Нұрбек Сайраның айтқаны дұрыс емес деп ойлайды.

ヌルベク・サイラの・言ったこと・正しい・ではない・と・考える

「ヌルベク（人名）はサイラ（人名）が言ったことは正しくないと思っている。」

これは、

(16) Нұрбек [ср[_sСайраның айтқаны дұрыс емес] [сдеп]] ойлады.

のように、主文の中に文 “Сайраның айтқаны дұрыс емес” が埋め込まれていると考えられる。

補文の中に өзがある例としては (17) のようなものが考えられよう。

(17) Нұрбек Сайра да өзін қинай береді деп ойлайды.

ヌルベク・サイラ・も・自分（所有・対格）・苦しめ・与える・と・考える

「ヌルベクはサイラも自分を苦しめていると思っている。」

(17) において先行詞は何であるか考えてみよう。(17) では登場人物は Нұрбек と Сайра の二人であるので、先行詞はそのうちのどちらかになることが予想される。Нұрбек が主文に Сайра が補文に属していることも確認しておこう。また (17) では Нұрбек も Сайра も主語であると考えられる。すなわち、Нұрбек は主文の主語、Сайра は補文の主語である。結論を述べると (17) では өз の先行詞は Сайра である。つまり өз と先行詞は同じ文に属し、かつ先行詞はその文の主語である。

では、өз と先行詞は必ず同じ文に属さなければならないのだろうか。次の例を見てみよう。

(18) Нұрбек Сайра да өзін құрметтейді деп ойлайды.

ヌルベク・サイラ・も・自分（所有・対格）・尊敬する・と・考える

「ヌルベクはサイラも自分を尊敬していると思っている。」

(17) と (18) は補文の動詞が違っただけでそれ以外の部分は同じである。ところが (18) では (17) とは違って өз の先行詞は Нұрбек であると解釈される。つまり、өзі と先行詞は同じ文にない。(17) と (18) は動詞以外はほとんど同じでありながら、先行詞の解釈はそれぞれ (17) は補文、(18) は主文、と一致していない。理由は今のところはっきりしないが補文の動詞に関係がありそうである。

次に補文の動詞として сындау 「批判する」を用いた例を見てみよう。

(19) Нұрбек Сайра өзін сындады деп ойлады.

ヌルベク・サイラ・自分（所有・対格）・批判した・と・考えた

「ヌルベクはサイラが自分を批判したと思った。」

(19) はあいまい（両義文）であり、先行詞は Нұрбек とも Сайра ともとることができる。

このように、先行詞と Θ は同じ文にある場合もあればそうでない場合もある。いずれにしても先行詞は必ず Θ と同じ文になければならない、ということはない。

それでは次に先行詞が主語以外の可能性を考えてみよう。

(20) Нұрбек Сайра Аманболға өзінің суреті бар кітапты көрсетті

ヌルベク・サイラ・アマンボル（与格）・自分（所有・属格）・写真・ある・本を・見せた
деп ойлады⁽¹³⁾ .

と・考えた

「ヌルベクはサイラがアマンボル（人名（男））に自分／彼の写真が載っている本を見せた
と思った。」

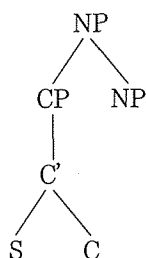
(20) では先行詞は Нұрбек/Сайра/Аманбол の三つが可能である。

この中で Нұрбек と Сайра は主語であるが、Аманбол は主語ではない。即ち先行詞は必ずしも主語である必要はないということが言える⁽¹⁴⁾。

3.2.2 関係節

カザフ語の関係節は現在研究が進められている最中で、その構造記述に定説があるわけではない。本稿では、異論もあろうが、カザフ語の関係節をチョムスキーの付加構造 (Ross 1967) を参考にして、次のように考えておく。

(22)



本節ではこのような関係節を持つ文において、 Θ とその先行詞の関係を考察し、 Θ とその先行詞が同じ文になければならないかどうかを明らかにする。

関係節を含む次の例を見られたい。

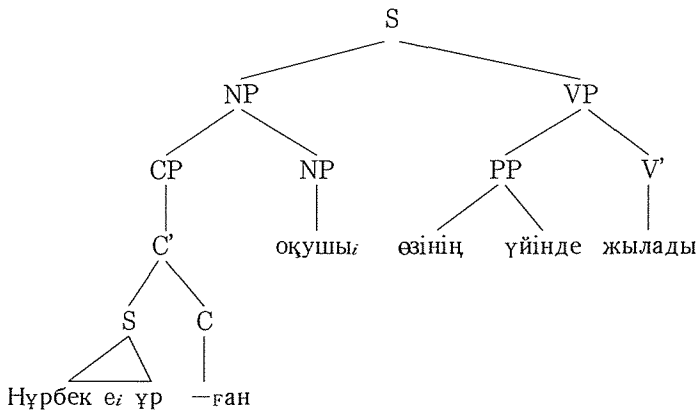
(23) Нұрбек ұрған оқушы өзінің үйінде жылады.

ヌルベク・なぐった・学生・自分（所有・属格）・家で・泣いた

「ヌルベクがなぐった学生が自分の家（＝学生の家）で泣いた。」

(23) では先行詞は *оқушы* である。ここで先行詞 *оқушы* と *өз* が文中でどういう関係にあるか見てみよう。

(24)



関係節の中に文が含まれるとすると、(23) (= (24)) には文が二つあると考えることができるが、その中で *өз* を支配するのは主文だけである。つまり、*өз* と先行詞は同じ文に支配されていると言える。それではこのような関係節を持つ構造の文において、関係節の中のものが先行詞になることはできないのだろうか。以下、この点を考えてみたい。

(25) Нұрбек пісірген тамақ өзінің бөлмесінде бұзылып кетті.

ヌルベク・煮た・料理・自分所有・属格・部屋で・腐って・しまった

「ヌルベクが作った料理が彼の部屋で腐ってしまった。」

(25) では *өз* を支配するのは主文だけであるが、先行詞 *Нұрбек* を支配するのは主文と関係節の二つであり、直接には関係節の中の文に支配される。つまり、別々の文に支配されるのである。このように、*өз* と先行詞は必ずしも同じ文に支配される必要はないと言える。

なお、(25) を見て *тамақтың бөлмесі* 「料理の部屋」というものはあり得ないから自動的に先行詞は *Нұрбек* であると解釈されるのでないかという反論も出てこよう。なるほど、確かに料理が部屋を所有するとは通常は考えられないから *тамақ* 「料理」が先行詞になることはないと言えよう。しかし、だからと言ってそのことが、ここで問題になっている *Нұрбек* が先行詞として

解釈されることを否定することにならない。なぜなら、もし、主文の主語が先行詞になれないのであれば、тамақを先行詞にすることができない文は先行詞のない容認不可能な文になるはずである。ところが、(25)はカザフ語として少しもおかしなところがない。例えば、日本語では先行詞は主語である必要があると言われているが、「太郎があげたアイスクリームが自分の部屋でとけてしまった。」という文で「アイスクリーム」を「自分」の先行詞にすることは意味的におかしいからといって「太郎」を先行詞にすることはできないであろう。「太郎」は主語でないからである。(25)においてももし主文にあるものが先行詞になれないのであれば、Нұрбекは先行詞になれないであろう。しかし実際はНұрбекはөзの先行詞として解釈されているわけである。したがって先行詞は同じ文になくてもよいという結論に変わりはない。もっとも、先行詞としての解釈に優先順位があるらしいことは事実であり、その解明もされなければならないが、本稿の範囲を越える。今後の課題にしたいと思う。

上で見たのはөзが関係節の外にある例だったが、今度はそれとは逆に関係節の中にөзがある例を検討してみよう。

(26) Нұрбек_i Сайрадан өзі_i жазған кітапты 1000 теңгеге сатып алды.

ヌルベク・サイラ(奪格)・自分(所有)・書いた・本を・1000・テンゲに・売買して・得た
「ヌルベクはサイラから自分が書いた本を 1000 テンゲ(貨幣単位)で買った。」

(26)ではөзは関係節の中にあり関係節の主語になっている。先行詞は関係節の外にあるНұрбекである。このように、өзが関係節の中にある場合でもやはりөзと先行詞は別々の文に属することができる。

本節の考察を通して、関係節を含む文においても、өзと先行詞は関係節の内外、すなわち別々の文に属することができ、同じ文に属する必要はないということがわかった。

3.3 と先行詞の文中での位置関係

前にも述べたように、日本語では「自分」は主語である必要があるが、「自分」とその先行詞は同じ文になくてもよいという条件がある。しかし、主語でありさえすれば先行詞になれるわけではない。例えば、(27)では「太郎」は主語であるにもかかわらず先行詞にはならない。

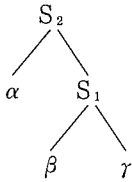
(27) 太郎が批判した人が自分の家で自殺してしまった⁽¹⁵⁾。

(27)のような文で「太郎」が先行詞にならないことの説明として、「自分」と先行詞の間の関係の条件に「先行詞は「自分」を統御する」という条件があると言われている(井上 1976)。ここでの統御とは次のような概念である。

ある要素を支配する最初のS節点が支配している接点はその要素によって支配される。例えば、

次の構造では α は $S_1/\beta/\gamma$ を統御していることになる。

(28)



では、カザフ語においては Θ と先行詞の関係はどうなっているのだろうか。先行詞は Θ を統御しなければならないのだろうか。本節ではこの点を明らかにする。

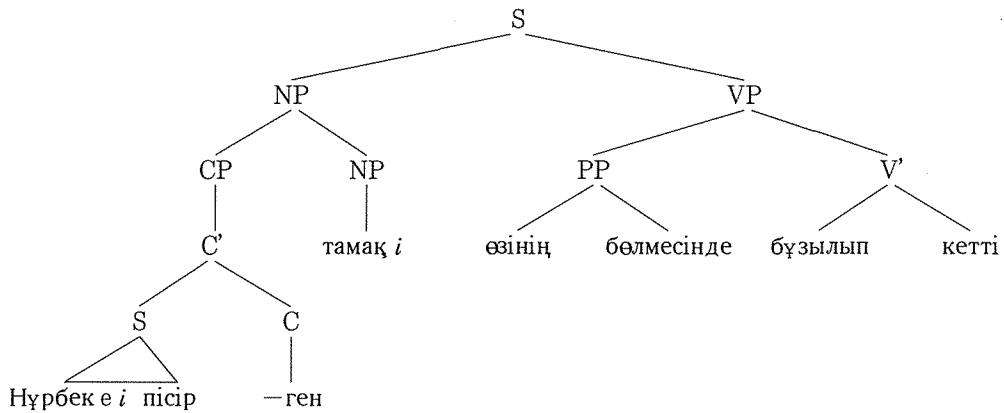
(29) Нұрбек пірсірген тамақ өзінің бөлмесінде бұзылып кетті.

ヌルベク・煮た・料理・自分（所有・属格）・部屋で・腐って・しまった

「ヌルベクが作った料理が彼（＝ヌルベク）の部屋でくさってしまった。」

(29) では先行詞である Нұрбек は Θ を統御していないが、Нұрбек は確かに先行詞である。

(30)



このように、カザフ語では先行詞は必ずしも Θ を統御する必要はないことがわかった。ところが、ここに興味深い例がある。

(31) a. Нұрбекі Сайраны Θ_i , i тұратын үйден әкетті.

ヌルベク・サイラ（対格）・自分（所有）・いる・家から・連れ出した

「ヌルベクはサイラを自分／彼女が住んでいる家から連れ出した。」

b. Нұрбекі Θ_i , $*i$ тұратын үйден Сайраны әкетті.

ヌルベク・自分（所有）・いる・家から・サイラ（対格）・連れ出した
 「ヌルベクは自分が住んでいる家からサイラを連れ出した。」

(32) a. Нұрбек_i Сайра_jмен өзі_i _j тұратын үйде ойнады.

ヌルベク・サイラと・自分・いる・家で・遊んだ
 「ヌルベクはサイラと自分／彼女が住んでいる家で遊んだ。」

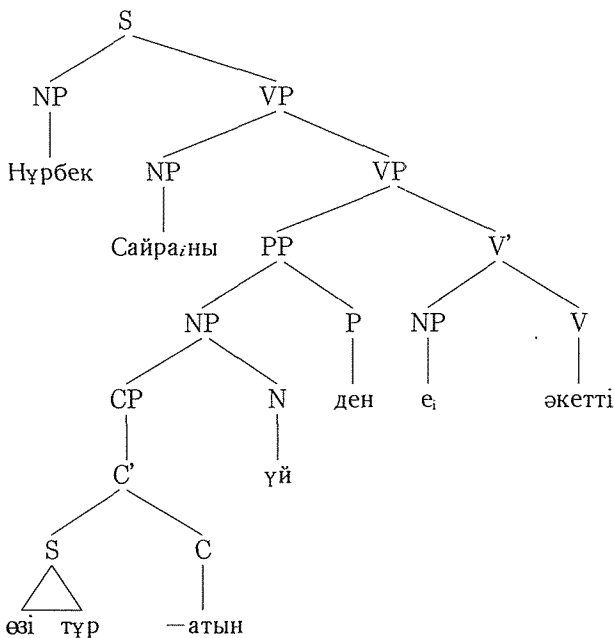
b. Нұрбек_i өзі_i _{*j} тұратын үйде Сайра_jмен ойнады.

ヌルベク・自分・いる・家で・サイラと・遊んだ
 「ヌルベクは自分が住んでいる家でサイラと遊んだ。」

(31) (32) において、a.と b. は語順が少し違うだけである。ところが、a. は、主語ではない Сайра も先行詞になっているが、b. は、Нұрбек だけが先行詞になっている。

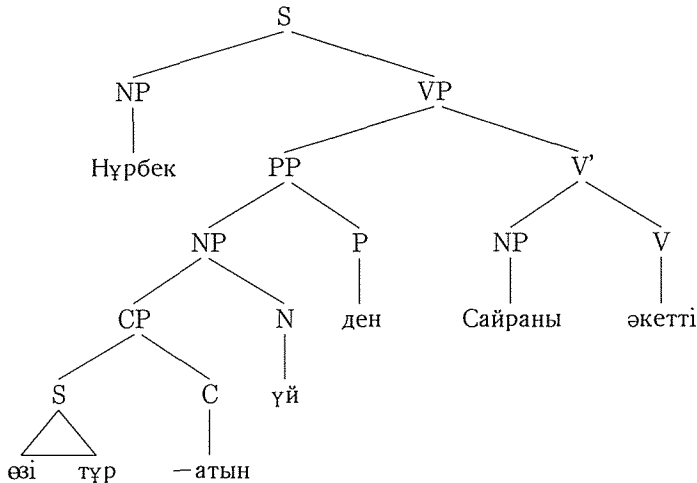
上のような違いは何によるのだろうか。文構造を調べてみると、例えば、(31)a. は次のようになっていると考えられる。

(33) a.



(31) b. は次のようになろう。

(33) b.



上にあげた構造 (33) から、a. では、Сайра を支配する一つ目の枝分かれ節点が *өз* を支配しているが、b. では Сайра を支配する一つ目の節点は *өз* を支配していないことがわかる。つまり、a. では Сайра が *өз* を c 統御しているが、b. では Сайра は *өз* を c 統御していないのである。c 統御の定義は次の通りである。

ある要素を支配する最初の枝分かれ節点が支配している節点はその要素によって c 統御される (三原 1994)。

(31) から、主語以外の要素が先行詞になるためには、*өз* を c 統御する必要があるといえそうであるが、この点に関してはさらなる検討が必要である。

4. おわりに

以上の考察からわかったことは次の二点である。

1. 先行詞は主語である必要はない。
2. *өз* と先行詞は同じ文になくてもよい。

このことから、カザフ語の *өз* は、英語の再帰代名詞、あるいは、日本語の「自分」などと比べると先行詞との関係において制限がゆるいといえることができる。繰り返しになるが、英語の再帰代名詞、日本語の「自分」について一般的に言われている条件は次の通りである。

英語の再帰代名詞

- ・再帰代名詞とその先行詞は同じ文になければならない。

(先行詞は主語でなくてもよい)

日本語の「自分」

- ・「自分」の先行詞は主語でなければならない。
(「自分」とその先行詞は同じ文になくてもよい。)

英語におけるような「同じ文になければならない」、日本語におけるような「先行詞は主語である」という条件がいずれもないということは、カザフ語の *өз* とその先行詞との間に成り立つ条件はゆるいということである。

また、これとは別にここであらためて (12) を見てみよう。

(12) Сайра Нұрбекті өзінің үйінде ұрды.

サイラ・ヌルベク (対格) ・自分 (所有・属格) ・家で・なぐった
「サイラはヌルベクを彼の部屋でなぐった。」

(12) の日本語訳を見ると「「彼」の部屋」となっている。日本語の「彼」に相当するカザフ語は *ол* であると考えられるが、そうすると今度は *ол* と先行詞の関係は何かという疑問が生じる。今後は *ол* などを含めてさらに研究を深めていきたい。

注

- (1) Akatsuka (1976), Inoue (1976) など。
- (2) 現在のところ最大のカザフ語文法書。
- (3) 補助格というのはカザフ語の *көмектес септік* を訳したものである。
- (4) *өз* だけではなく、人称代名詞にも性の区別はない。
- (5) 同じような接尾辞はトルコ語などチュルク系の言語に広く見られる。本稿では勝田 (1986) にならって所有接尾辞と呼ぶ。
- (6) もちろん所有だけを表すわけではない。例えば *өз-ім* は「私が所有することば」という意味ではない。
- (7) 日本語の「彼自身」などについての研究は Nakamura (1989) がある。
- (8) 本稿におけるカザフ語の用例は作例を基本にインフォーマントから採集したものを加えた。作例もすべてインフォーマントのチェックを受けている。インフォーマントとして協力してくださったカザフ人の Б. Д. 氏と Б. С. 氏 (共に 30 代男性) に感謝申し上げる。特に Б. Д. 氏は本稿にあげた以外の 100 を越える例文についてもアドバイスをくださった。氏の協力なくしては本稿の執筆は困難であったと思われる。
- (9) かっこ内に「所有」とあるのは所有接尾辞が付いていることを、「属格」「対格」などあるのは格語尾が付いていることを表す。ただし、*өз* 以外の語については格語尾を含めて訳をつけて (「家・位格」とせずに) 「家で」のようにしたものもある。
- (10) 日本語の「自分」などは井上 (1976) にあるように再帰代名詞ではなくて再帰名詞と呼ばれることがある。
- (11) 三原 (1994) の用例。
- (12) 郡司 (1994) にあげられている用例の人名の部分を変えたものである。

- (13) 郡司 (1994) の日本語の例文を参考にした。
- (14) ただしインフォーマントによると Аманбол を先行詞にすることは可能だが、Нұрбек あるいは Сайра を先行詞とするのがより自然だという。
- (15) 郡司 (1994) の例文をもとにした。

参考文献

- Балақаев, М. (1992). *Қазіргі қазақ тілі*. Алматы.
- Қараев, М. Ә. (1993). *Қазақ тілі*. Алматы.
- Қазіргі қазақ тілі*. Қазақ ССР ғылым академиясы. 1954.
- Akatsuka, N. (1976). Reflexivization: A Transformational Approach. Shibatani (ed.) *Syntax and Semantics 5: Japanese Generative Grammar*. Academic Press.
- Geng, Shimin; Li Zengxiang (1985). *Hasakeyujianzhi*. Beijing.
- Inoue, K. (1976). Reflexivization: An Interpretive Approach. Shibatani (ed.) *Syntax and Semantics 5: Japanese Generative Grammar*. Academic Press.
- Krueger, J. R. (1980). *Introduction to Kazakh*. Indiana University.
- Nakamura, Masaru (1989). Reflexives in Japanese. 『言語研究』第 95 号.
- Ross, J. R. (1967). *Constraints on Variables in Syntax*. Ph D Dissertation. MIT.
- 井上和子(1976). 『変形文法と日本語』. 大修館書店.
- 勝田茂(1986). 『トルコ語文法読本』. 大学書林.
- 郡司隆男(1994). 『自然言語』. 日本評論社.
- 三原健一(1994). 『日本語の統語構造』. 松柏社.

(1997. 9. 19 受理)